



これは世につたえておきたい
かたっておきたい
わが胸の底から真実のおもい
人生幾山河のめぐりあい
あの日の風やひかり そして空のひとひら
哀歡のかがり火に生きた幾年月の路
「自分史図書館」は その証言館です。

私の稀観本ノート その9

椎窓 猛

「南極海 極限の海から」



▶去る8月20日開催の「八媛ふるさと一燈大学」講師に南極海研究家の永延幹男氏を迎えた。永延さんは筑後市出身、八女高校21回(昭和44)卒、東京水産大から東大大学院修了後、地球の自然研究に「志」し、これまでに9回に及ぶ南極海調査へ。

▶南極調査体験から、地球をかんたんにたとえれば「一つの盆栽、その鉢の底の部分に南極と考えればよろしい。」南極の自然状況から地球の未来を予測の可能性など、貴重な話題を聴くことができた。

▶集英社からは2003年『南極海・極限の海から』と題された新書が刊行されている。これに永延さんは●南極は、地球に残された最大級の野生のいのちの場です。●豊かな資源の幸をヒトに恵んでくれる豊饒の地です。●地球環境の変動の視点からしても…などと緊急、重要な秘密のカギを持つ南極大陸を中学生にでも理解できるように親しみやすい文章で執筆されている。▶八女一円の図書館、公民館に受講の代表を通して寄付された。どうか、わが八女の地が生んだ貴重な、誇り得る南極探検、調査家であると認識されるよう私は希望したい。

私への恵贈の書には、一句したためてあった。
“氷裂け我が星の果て島の舞”

うすぐらき海の面に立つ夫婦岩波の音
高く風のつめたし
とうくと宇治の流れをきながら
昼餉を食せば茶のかをりする
大阪の街を流るる淀川は
にぎりを見せさみしかりけり
たらちねの母の故郷は海の彼方
遠くかすみてなつかしきかな
紺碧のうねりをたてて我汽船は
瀬戸の内海をすゝみゆくなり

みどりの旅

海達公子
(高瀬高女四年生)



○内田麟太郎さんの絵本93冊

▶8月21日、須恵町の図書館創設10周年記念に内田麟太郎さんの記念講演会が催された。近隣の町に住む娘孫尚子にも会えるしと思妻とつれだって出かけた。もちろん内田さんとも会えたり、親しくつきあっている元校長の早川真吾先生とも会えるなど、三重のよろこびであった。

▶絵ことば作家という内田さんは「ともだちや」シリーズで大ヒット。子どもはもとより、若いお母さん方のファン激増。▼須恵の図書館のみなさんは熱心だと私が感心したのは内田さんの絵本著書一覽93冊を、画家、出版社、出版年月日と、ていねいに編集し、配布されていることであった。▶帰って図書館関係の仕事のE君にそれを話したら、インターネットで調べればすぐに判るといった顔であったが、たくさんの人々に——というのがサービスとまでは考え至らないと思い、いささか失望。

▶ところで、この講演会で、ひょうひょうとしたナンセンス派の振る舞いしか見せなかった内田さんの真摯な、発想の根幹をはじめ聴く思いがした。ここにとりだした「おじいちゃんの木」の話などは、眼に見えない遠く流れる父性を一本の糸のように語った絵本である。

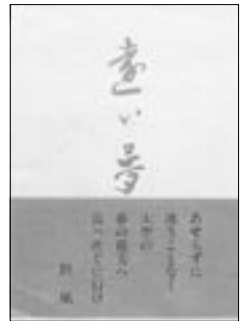
(自分史図書館館長)



○海達公子「赤い鳥」の少女詩人

▶書店でこの夏、ふと目にとめたためずらしい本である。それも大牟田のほんの先の荒尾で、大正末期から昭和初期にかけ、鈴木三重吉主宰の「赤い鳥」に詩を投稿、北原白秋の選評に賞讃しばしば。高女時代には短歌にも親しみ、歌人若山喜志子にも注目されたが、高女卒業式後、心臓マヒで死去。17歳未満の若さであった。

▶昭和56年(1981)募金によって、公子の母校、荒尾第二小学校の校庭にブロンズ像、詩碑「夕日」が建立されたといううわい話がある。この編著は熊本県の国語教育家規工川祐輔先生の労作。熊本日々新聞社の発行。



○ 厳冬の旅

陶山よし子

60ページ余の小さな冊誌だが、手づくり本らしく、プラハ、ウィーン、ハンガリー、ブタペストへのつましく雪の結晶を見るような旅情にとむ内容である。プラハ城からの町の眺め、写真も陶山さんだそうであるが、古色蒼然の美がしのばれる。

昨年、モルダウ川は大洪水、そうとうな被害に著者はお見舞い、受付の年配の婦人の笑顔。

陶山さんは、中学生の頃、スメタナ作曲「モルダウ」を、合唱曲コンクールで熱心に歌ったあのモルダウ川を、40年もの長い時を経て、今、出会えたと感動、しかし洪水で無残な光景。“水上は遠くボヘミアの豊かな我がモルダウよ”その思い出が寄付金を——と。

東欧の雪の街を、娘さんとのふたり旅。すばらしい道中記だと拝読した。

○ 泣いても 笑っても またあした

堀江 悦子

あとがきに堀江さんはこのように書きつけている。

「人には色々な人生があり、人が生まれて死ぬまでには多くの苦しみや悲しみ、また楽しみなどを体験します。私も若いとき二人の障害児を産んで神様を恨みました。」と悲痛の底から、いっぱい愛情をもって育てるという生き方へ。

その後、障害者の通所施設「からたち作業所」を設立、からたち福祉会理事長として現在、ご活躍。

ちくごタイムス代表塩塚純夫氏は、「何度も襲う苦難に立ち向かい、明日を信じて生きた女性の半生がこの本にあります」と述べられているが、まさに「泣いても、笑っても、またあした」の境地へたどられるまでの行程には、読みながら頭がさがってくる。子育て中の親にすすめたい一冊である。

○ いま命輝いて

野尻千穂子

「失恋を重ねるたびに心の殻を脱ぎ捨ててきた気がします 一緒に生きていこうと言ってくれた人と共に暮らすようになり この私が母になりました 今年の夏も向日葵は咲きました やっぱり凧と光に向かって咲いています」

この本は、堀江悦子さんとはちがって著者自身が障害を乗り越え、出産、わが子を胸に抱いたという「命輝く日の今を語られた人生行路」の記である。

感動を呼ぶ書のはじめに作家三浦綾子さんの言葉がある。「何よりも心打たれたのは、紗織さんを生むと決心された時、ご主人は、もし障害のある子が生まれたら仲間が一人増えたと思えばいい、なんとすばらしい言葉でしょう」純粋な信仰心からの言葉と、三浦さんは感銘している。

○ 遠い夢

吉 富 徳

吉富徳氏は大正9年糸島郡雷山村の生まれ。若い頃は三菱電機勤務後、ダイヤ機工商会創業、家庭電気販売に精励、その過程のうちに、小倉駅舎前広場に祇園太鼓の銅像建立を決意。楠公銅像製作の高村光雲の直弟子米静雲先生に依頼のいきさつ。銅像は昭和34年7月9日除幕されている。太鼓を打つ三人の少年像の見事な出来栄え。(こんど小倉駅に行ったら、じっくりと見なおしたい。たぶんこの製作秘話を知る人は数多くはあるまい)

「無法松の一生」の作家岩下俊作氏は「自分の利益になる事なら張切ってやるが、そうでなければやらない事が多い。雅量が小さいと言うか」と述べ、青年会議所で着想の吉富さんらを賞讃している。

吉富さんは瀬戸内寂聴さんの『寂聴巡礼』を愛読、聴講に向かわれた話も後半に記されている。

受贈図書紹介 9

順次紹介していますが受贈日より多少遅れます。あしからずご了承下さい。

自分史 いのち輝いて

楠本 利夫 吹田市

ある被爆者の戦後史

小峰 秀幸 長崎市

いのちの流れ……柳瀬 敏幸

人生はバーミリオンとブルーの混じり合い

福山 清隆 奈良市

自分史 ……………上田 銀冶 川内市

広報マンのつばやき 下田 高大 大牟田市

風に吹かれて……久賀 征哉 三輪町

藜よありがとうそしてさようなら

田中 清子 長崎市

残燈 ……………目加田 誠 大野城市

私の歩いた道 …阿部 逸郎 田川市

商人道 ……………長谷川裕一 福岡市

自分史 風化を見つめて

渡辺 要三 ブラジル

落陽 ……………山口 昌登 鳥栖市

点字 ……………山口 昌登 鳥栖市

久留米高専40年誌 久留米工業高等専門学校

蔵書目録ができました

¥240 送料込(郵便切手可)

開館 午前9時～午後5時 入館無料
休館 土曜・日曜、祝祭日、年末・年始、その他
休館することがあります。予めご確認下さい。

